

淀川左岸の文禄堤について

—「七曲り」と狭義の文禄堤—

木 谷 幹 一 *

I. はじめに

自然地理学では、航空写真の実体視や現地踏査などによって微地形の分類が行われ、それぞれの微地形がどのような過程を経て形成されたのか、地形発達史的な視点で考察されてきた。日下雅義は、古代の港などの人工構築物や天皇家内に活断層を見出してきた¹⁾。額田雅裕は豊臣秀吉の関わった水攻め時の築堤長について疑念を抱き、自然地理学的な立場で考察して、工期や人足ならびに築堤材料の調達などの諸々の手間から考えても合理的な仮説²⁾を提起した。額田は、まず和歌山県の紀伊太田城攻めでは従来説の 5 km 余の築堤を疑問視し、数百 m 程度の築堤で水攻めが可能となる場所に、紀伊太田城があったと仮説を提起した³⁾。続いて岡山県の備中高松城攻めでは、現存する蛙ヶ鼻水攻め堤付近での約 300 m の築堤だけで水攻めが可能であったこと⁴⁾、埼玉県忍城攻めでは従来説の 13.8 km の築堤を約 800 m の築堤だけで水攻めが可能であること、岐阜県の竹ヶ鼻城攻めでは既存の輪中堤だけで水攻め

が可能で築堤の必要性がなかったこと⁵⁾など、額田は、自然地理学の立場で次々に画期的かつ妥当な仮説を提起し続けている。当時の戦闘では短期間で成果を上げる必要があるため、籠城する相手方に対して水攻めを選択した場合には、工期や諸々の手間がかかる築堤作業などは最小限に抑えたいので、既存の堤などの人工構築物や自然地理的条件などは最大限に活用されてきたわけである。

次に、大阪から京都間の織豊期の土木遺産をみてみたい。大阪府交野市の私部城跡きさべが現存する。これは、考古学的な発掘によって更新世段丘とその開析谷を組み合わせて城の縄張りが行われている⁶⁾。豊臣秀吉が関わった土木遺産では、京都市の御土居堀がある。これには、天神川の開析谷や鴨川の完新世段丘を利用した普請が行われている⁷⁾。豊臣秀吉に関わらず、当時では自然地理的条件を最大限活用することは一般的なことであろう。つまり、これは豊臣秀吉が関わった土木事業の特徴とみなすこともできる。

さて文禄 5 (1596) 年には、豊臣秀吉の命によって淀川兩岸に堤が整備された。左岸の堤

* 大阪市立諏訪小学校

キーワード：微地形、七曲り、鋭敏粘土、淀川左岸、茨田郡

Key words : Micro-landform Units, Meandering Road, Sensitive Holocen Clay, Left Bank of Yodogawa River, Manda-gun Osaka prefecture

は「文禄堤」と呼ばれ、堤防上は街道として利用された⁸⁾。これも完新世段丘や、既存の堤などを少し補修しただけで、淀川左岸を連続する堤に仕上げられたのかもしれない。しかし文献史学の立場では、文禄堤は「その名は有名である割には実態がよくわかっていない。」⁸⁾とある。管見する限りでは、街道としての「文禄堤」を取り上げただけ⁹⁾で、堤や街道などの近世以前における土木遺産を研究する場合には、まず文書、次に発掘成果などの一次資料を源泉としているためかもしれない。

まず「文禄堤」の分布と特徴を整理して、自然地理学の立場で検討してみる必要性がある。そこで淀川左岸の「文禄堤」について3区間にわけて、それぞれの区間の特徴を述べ、自然地理学の立場で検討する。

II. 「文禄堤」について

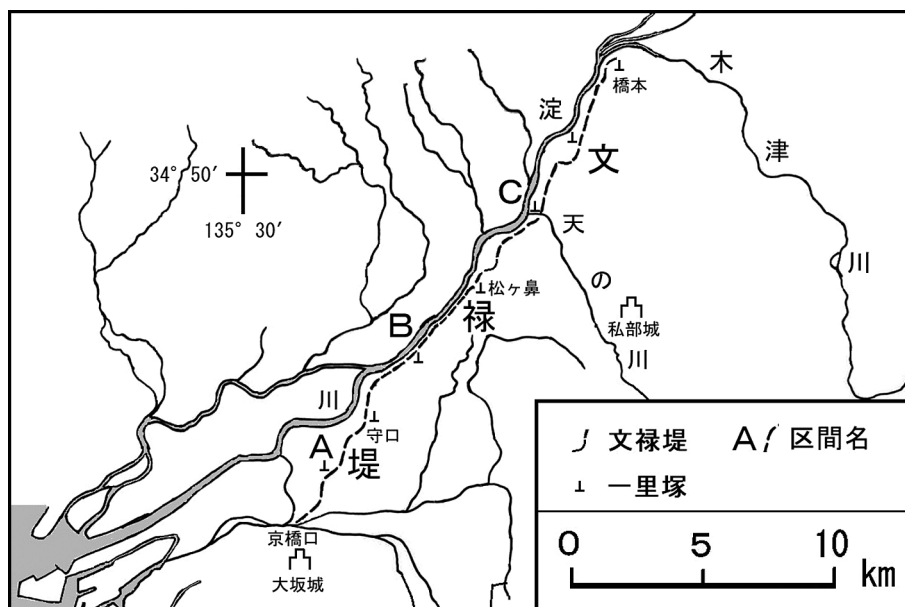
「文禄堤」の名称は、明治19(1886)年に大阪府によって編纂され、翌年に発刊された『洪水志』¹⁰⁾で確認できる。その序文に「舊誌ニ云茨田郡ノ西澱河ノ堤長二里許文禄年間築ク所土人文禄堤稱ス」の一文が引用されている。「旧誌」¹¹⁾の記述によると、茨田郡(守口市、寝屋川市と枚方市の一部)における淀川左岸堤防の約8km分は文禄年間に築造されたので、地元の人々はこの部分を「文禄堤」と呼んでいたと読み取れる。昭和30年代になると、地元の伝承などをもとにして『守口市史』第1巻の付図として「文禄堤」の分布図が作成された¹²⁾。最近では、これらの成果はガイドマップ¹³⁾として再編・普及が行われ、大阪市や守口市などの自治体が作成した小学生向けの社会科副読本にも「文禄堤」がとり上げられている¹⁴⁾。

次に、織豊期から江戸時代中期の文書から「文禄堤」に相当する記述を確認しておきたい。寛永年間の史書と言われる『當代記』には「慶長元、丙申、伏見御普請ト而、二月、諸國衆生河内國、堤関東衆築之。」¹⁵⁾とあって、伏見城築城時に関東地方の大名が河内国の堤を造ったというのである。次に松平家忠の孫・忠冬が編纂した『家忠日記追加』には「慶長元年、丙申、正月十六日、伏見ノ城ヲ修スル時、河内堤ハ東國ノ人夫是ヲ築ク。」¹⁶⁾とある。徳川家康の伝記である『武徳編年集成』には「慶長元年丙申正月、小。中旬、秀吉、東國ノ諸侯ニ命シ、河内堤ヲ築カシメラルト云々。」¹⁷⁾とあり、ほぼ『當代記』と同じ内容であるが、「文禄堤」は「河内堤」と呼ばれている。なお、慶長元(1596)年への改元は10月27日以降なので、これらの文書から文禄5(1596)年に築堤が行われたこと、「河内堤」と呼ばれていたこと、築堤作業には関東地方の大名が当たったことが読み取れる。さらに「河内堤」について、小早川能久の『翁物語』には「一年霖雨 河内堤切れ 國中俄に水になる由を申す、之に依り、秀吉自身京橋口まで出て、下知せし程のことなれば。」¹⁸⁾とある。つまり、雨の多い年に河内堤が切れて浸水しはじめたので、大坂城の京橋口まで豊臣秀吉が出てきて、堤の補修などを直接指図していたというのである。この文書から、「河内堤」の起点は京橋口であることが読み取れるので、「文禄堤」の起点は京橋口と定められよう。

III. 文禄堤の特徴と自然地理学的検討

1. 区間Aについて

第1図に文禄堤の分布を示した。文禄堤は、



第1図 研究対象地域

現在の淀川流路に対してほとんど平行に築造された堤と、そうでない堤との組み合わせのように見える。以下、大坂城の京橋口から守口一里塚までを区間A、守口一里塚から松ヶ鼻一里塚まで区間B、松ヶ鼻一里塚から橋本一里塚までを区間Cとして、それぞれの区間

の特徴を紹介し、自然地理学的な検討を行う。

区間Aの特徴は野江の「七曲り」(第2図)と関目の「七曲り」(第3図)、ならびに京阪守口市駅前の文禄堤である。

「七曲り」は「豊臣秀吉が大坂築城の際、敵の軍容や兵数を察知するため蛇行させた」と



第2図 野江の「七曲り」

大阪市都島区内代1丁目7番地付近に入ったところの「七曲り」、道路がカーブした状態で保存されている。(2018年3月撮影)



第3図 関目の「七曲り」

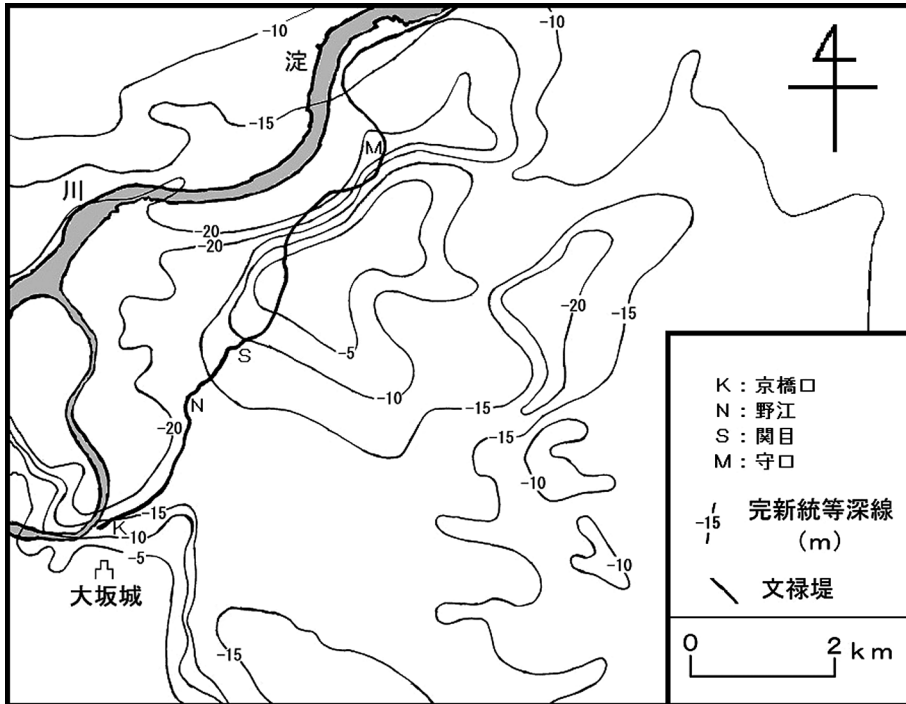
大阪市旭区高殿4丁目10番地付近に入ったところの「七曲り」、道路がカーブした状態で保存されている。(2018年3月撮影)

伝え、「関目のあっちゃの七曲り七つ曲って七曲りにくい七曲り」と子供の早口言葉ともなった(原文ママ。)¹⁹⁾という。また『大阪伝承地誌集成』の「関目の七曲り」の項には、「豊臣秀吉が大坂築城のおり敵の軍勢の規模がわかるように蛇行させたと伝え²⁰⁾とある。他にも、この伝承は関目の「七曲り」の南側にある関目神社の配布物²¹⁾にも紹介されている。つまり、豊臣秀吉の大坂城築城にともなって防備の一策として意図的に道を屈曲させたこと、その道は地元で「七曲り」と呼ばれていたのである。小橋屋卯兵衛の「絵本榎並八箇洪水記(享和三年五月カ)」²²⁾の「攝河穂水入村々當春作物見事出来図」という絵図に「七マカリ」と記された屈曲した道が描かれているので、江戸時代中期には「七

曲り」と呼ばれていたことが追認できる。なお野江の「七曲り」の南側には、平成2(1990)年に大阪市によって榎並猿樂発祥の地・榎並城跡²³⁾ 伝承地(第4図のN地点付近)の石碑²⁴⁾が建立されている。

次に京阪守口市駅前には、文禄堤が720 m程度残存している²⁵⁾。堤の天端(街道路面)は標高7 mを示し、平野面から比高約5 mの堤防が確認できる。文禄堤の南側には守口城跡(第4図のM地点付近)を伝承する寺院が立地している²⁶⁾。野江や守口では文禄堤に隣接して城跡があることから、城の縄張りも堤として再利用した可能性も考えられる。

次にこの場所に「七曲り」が設けられた理由を考察するために、第4図の完新統等深線図から大坂城の京橋口(K地点)～守口(M



第4図 区間A(大坂城京橋口～守口一里塚)
完新統等深線図(-m)は、宮地・田結庄・寒川(2001)を参照。

地点)間をみてみたい。京橋口(K地点)～野江(N地点)間では北西-南東方向に谷が、関目(S地点)～守口(M地点)間では台地が埋没地形として見出される。京橋口(K地点)～野江(N地点)間の谷は、かつての大和川の流路で²⁷⁾、関目(S地点)～守口(M地点)間の台地は更新統の大坂層群からなる非常に堅い地盤である²⁷⁾。台地には、地下-6m、-8m、-10m付近に平坦面が発達していて、これは縄文時代以降の海水準変動にともなう侵食面と考えられている²⁸⁾。さらに台地上を被覆する完新統には礫や砂などの粗粒な堆積物が主体で、その層厚は10m未満と薄い。標高は、T.P.1.5m～1.8mを示す。一方、京橋口(K地点)～野江(N地点)間では完新統は層厚20～28mと厚く²⁹⁾、とくに完新統には鋭敏粘土と呼ばれるN値0の超軟弱粘土が層厚15m以上堆積している³⁰⁾。そのため、標高はT.P.0.3m～0.4mを示している。つまり、かつての大和川の谷には鋭敏粘土が厚く堆積しているので、自然に地盤沈下が起こって、周囲に比べて標高が下がったのである。

以上から「七曲り」築造時には、すでに京橋口から関目にかけて緩やかな登り坂があったと考えられる。この坂は大坂城から見て北東方向への最初の坂であるので、容易に見当がつく。さらにこの坂に何度も屈曲をつけた道を通すことによって、意図的に人馬や荷駄のスムーズな移動を妨げ、大坂城からの監視の精度を上げていたと考えられる。

2. 区間Bについて

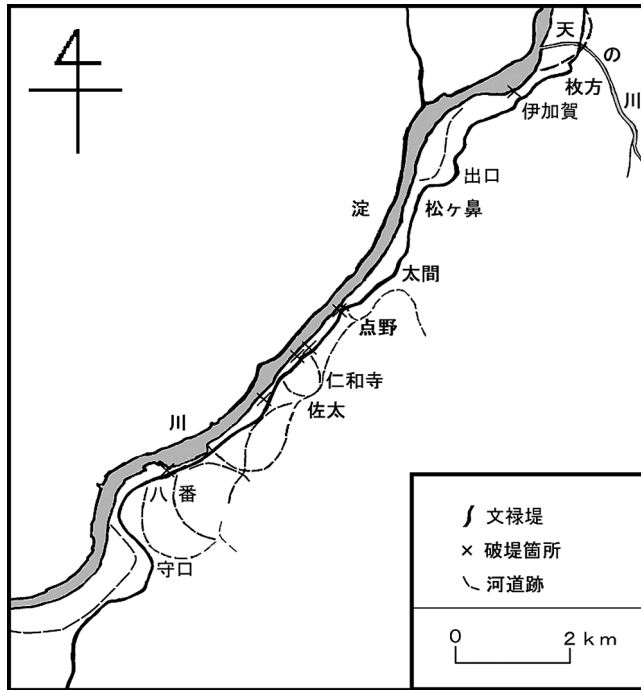
区間Bの特徴は、現在の淀川流路に対して平行に築造された堤がほとんどを占めていることである(第5図)。守口市佐太、寝屋川市仁^に和寺や同市太^{たい}間では文禄堤が部分的に

残存している³¹⁾。仁和寺では、文禄堤と一里塚址³²⁾(第6図)が残存している。区間Bの堤は中世以前の旧河道跡³³⁾を横断して築造されている。近代以降も淀川堤防として拡築されたために、文禄堤が各地に残存している。また江戸時代に発生した淀川水害のうち、延宝2(1674)年6月の仁和寺切れ、享和2(1802)年7月の点野切れ、文化4(1807)年5月の八番切れなどの大規模水害の原因となった破堤箇所(第5図)も区間Bに位置する³⁴⁾。これらの破堤箇所は、中世以前の旧河道跡³⁵⁾を横断して築造した部分である。区間Bの距離は2里であることや、中世以前の旧河道跡³⁵⁾を横断して堤が築造されていることから、この区間は中世以降の築造である可能性が高く、『洪水志』序文³⁶⁾に記された「文禄堤」そのものと指すと考えられる。

3. 区間Cについて

区間Cには枚方^{めがり}～三栗間、三栗～橋本間のように、現在の淀川流路に対してほぼ平行に築造された堤と、出口や三栗のように中世以前の旧河道³⁷⁾を避けて築造された堤が混在する(第7図)。さらに枚方市駅前再開発にともない、地下-2mに確認された堤が文禄堤と見做された³⁸⁾。室町期の文書には出口堤や伊香賀(現表記は伊加賀)堤³⁹⁾という名称が見られる。この区間では出口、伊加賀、三栗や楠葉で800m以上堤が残存している。

三栗付近の詳細図(第8図)をみると、段丘崖が複数確認できる。上位段丘は更新世段丘⁴⁰⁾で、崖の比高は約5～15m程度である。穂谷川左岸の更新世段丘には開析谷が発達し、その部分には溜池がみられる。一方、下位段丘には開析谷の発達がほとんどみられな



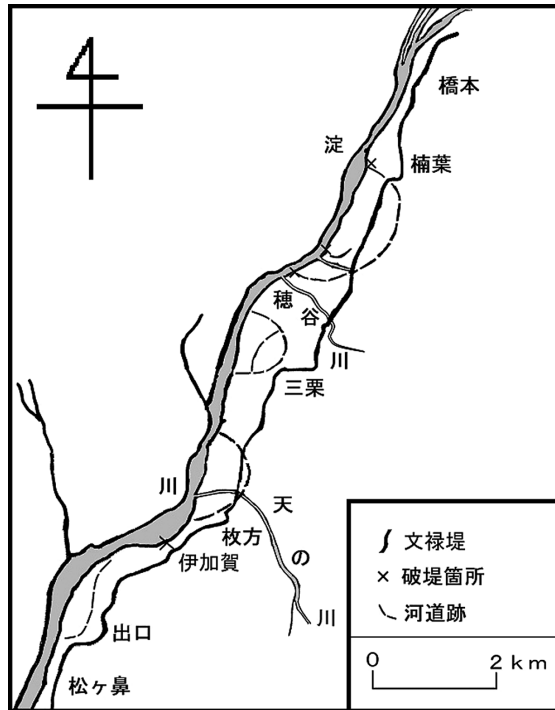
第5図 区間B (守口一里塚～松ヶ鼻一里塚)
旧河道などの記入は日下・青木 (2002) を参照。



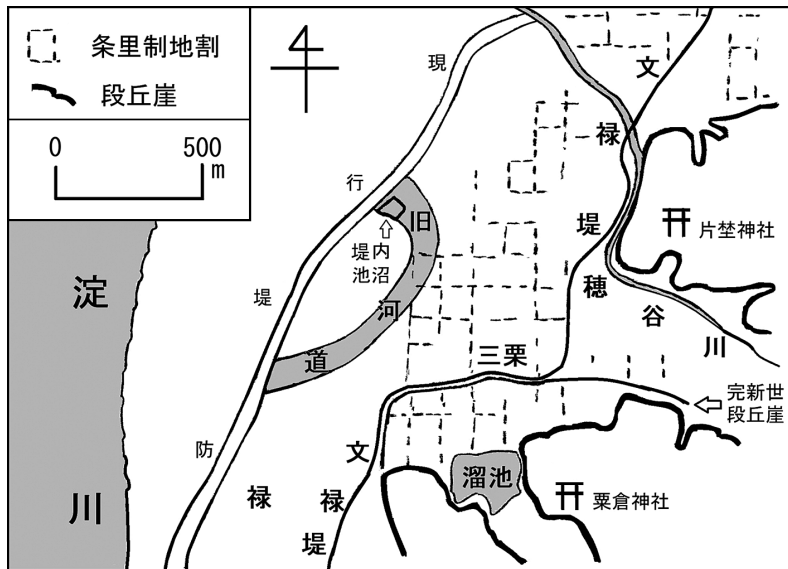
第6図 寝屋川市仁和寺の一里塚
高い方が現在の淀川堤防で、低い方が文禄堤である。正面の木は一里塚を示すエノキである。なお『河内名所図会』で紹介された文禄堤が約500m残存する貴重な場所である。

(2013年11月撮影)

い。下位段丘は上位段丘の開析谷に発達し、段丘面の形状が扇状であることから、上位段丘の開析谷に発達した扇状地が淀川、またはその支流河川によって完新世のある時期に段丘化したと考えられる。段丘崖の比高は、0.8～1.2m程度である。文禄堤は下位段丘崖に築造されているので、平野の微地形を利用して堤が築造されていることがわかる。また枚方～三栗間、三栗～楠葉間の堤は淀川に対して平行で、中世以前の河道跡⁴¹⁾を横断して築造されている。このことから、区間Bと同じく、これらの区間は文禄5(1596)年に築造された可能性も考えられる。



第7図 区間C (松ヶ鼻一里塚～橋本一里塚)
旧河道などの記入は日下・青木 (2002) を参照。



第8図 枚方市三栗付近の詳細図

大阪府知事室企画課 (1962) 『大阪府航空写真地図 (昭和36年)』の大K-6、昭和17 (1942) 年の大阪市航空写真などから予察図を作成。条里制地割は神英雄 (1990) 「桓武朝における造都と征討に関する歴史地理学的考察」、歴史地理学紀要、32、21-43頁を参照。

IV. まとめと今後の課題

文禄堤を3区間に分けて、それぞれの区間の特徴を紹介した。以下に、自然地理学的な検討を行った結果を要約する。

- 1) 文禄堤は、淀川に対して平行に築造された堤と、そうでない堤との組み合わせである。前者の堤は中世以前の旧河道を横断するので、文禄5(1596)年に豊臣秀吉が関東地方の大名に命じて新たに普請を行わせた可能性がある。一方、後者の堤は中世以前の旧河道を避けているので、中世の文書などで確認された既存の堤を補修しただけと考えられる。
- 2) 区間Aでは京橋口～野江の「七曲り」にかけては鋭敏粘土が厚く堆積しているため、地盤沈下が顕著である。関目の「七曲り」～守口宿にかけては鋭敏粘土がなく、地盤沈下がほとんどみられない。そのために野江の「七曲り」～関目の「七曲り」は、大坂城から見ると文禄堤の最初の登り坂として、監視に適した場所であったと考えられる。なお「七曲り」は大坂城との関係が不可欠であるので、区間Aは天正11(1583)年における大坂城の築城にともなって、一部では戦国時代の城郭の縄張りなども取り込んで計画的につくられた可能性がある。
- 3) 区間Bは堤長がほぼ2里であることから、「洪水志」序文にある文禄5(1596)年に築造した堤である可能性が高い。今後は、この区間の堤だけを文禄堤と呼ぶべきである。
- 4) 区間Cには室町期の文書で確認された堤と、文禄5(1596)年に築造された可能性のある堤が混在する。また、完新世の段丘崖を堤として利用された事例もあった。区間Cの特徴は、それまで存在したそれぞれの堤を連絡補修した区間と考えられる。

〔謝辞〕本論作成にあたり大阪市立中央図書館大阪室には史料調査にご協力頂いた。枚方市文化財研究調査会(当時)の西田敏秀氏には旧枚方宿遺跡での文禄堤遺構の見学の許可と助言を頂いた。また文禄堤の研究については、立命館大学名誉教授の日下雅義先生に何度も励ましのことばを頂いた。記して皆様に謝意申し上げます。

最後に本稿を大阪市の小学校社会科教育に全力を捧げられた元大阪市立常盤小学校長・元武庫川女子大学教授の堀公明先生に捧げます。

注

- 1) ①日下雅義(1985)「摂河泉における古代の港と背後の交通路」、古代学研究、107、1-13。
②日下雅義(1975)「応神天皇陵付近の地形環境」、考古学研究、21、67-84。
- 2) Nukata, M. (2018) Geomorphological Environment for Inundation Attacks: A Comparative Research, *The Journal of Ritsumeikan Geographical Society*, 30, 61-75.
- 3) 額田雅裕(2001)「紀伊太田城水攻めとその地形環境」、和歌山地理、21、1-12。
- 4) 額田雅裕(2004)「備中高松城水攻めの虚と実」、日下雅義編『地形環境と歴史景観—自然と人間の地理学—』、古今書院、121-131。
- 5) 前掲2)
- 6) 財団法人交野市文化財事業団(2013)『私部城跡調査速報展 解説資料』。
- 7) 御土居堀跡の分布は、中村武生(2005)『御土居堀ものがたり』、京都新聞社、174-271。地形分類図は、植村善博(1998)京都盆地の地震災害危険度マップ、『京都の地震環境』、ナカニシヤ出版を参照にした。その図の扇状地Ⅱが完新世段丘に相当する。
- 8) 例えば、村田路人(2009)『近世淀川の治水』、山川出版社、12-14。
- 9) 例えば、片山正彦(2018)「大阪冬の陣における堤防の役割—主に「文禄堤」と京街道を事例として」、交通史研究、93、1-18。
- 10) 大阪府編(1887)『洪水志』、大阪府、2。
- 11) 管見する限りでは、享和元年刊の秋里籬寫『河内名所図会 卷之六』、茨田郡の項に、「文禄堤当郡の西淀川の堤長サ二里許の川岸をいふ土人云文禄年中これを築くゆえ名とす」というのがある。
- 12) 守口市史編纂委員会編(1962)『守口市史』、1、守口市。
- 13) 例えば①財団法人大阪市文化財協会編(2000)『旭区の歴史と文化財』、(財)大阪市文化財協会。
②国土交通省国土計画局近畿街道・交流拠点ネットワーク推進会議編(2006)『街道ウォー

- キングマップ 京街道西国街道』③守口市教育委員会生涯学習課編 (2009～2013)『もりぐちぶらり歩きマップ』、I～VI、守口市。④旭区再発見まち歩きスタッフ (2011～2013)『旭区再発見まち歩き 街道をゆく』、I～III、大阪市旭区役所。⑤守口宿歴史文化マップ編集委員会 (2013)『守口宿歴史マップ』、守口門真歴史街道協議会。⑥風人社編集部 (2017)『ホントに歩く東海道』、17、地図4葉、風人社。
- 14) 例えば、①堀公明ほか編 (2010)『わたしたちの大阪 3・4年下』、日本文教出版、72。②川合春路監修 (2011)『わたしたちの寝屋川市』、寝屋川市教育委員会、134。③守口市教育研究会小学校社会科部会編集 (2012)『わたしたちの守口市』、守口市教育委員会、99-100、133、135、141。
- 15) 松平忠明編カ『當代記』。刊本として大阪市立中央図書館市史編集室編 (1967)『大阪編年史 第2巻 (自天正元年六月至慶長三年八月)』、大阪市立中央図書館、447。
- 16) 松平忠冬編『家忠日記追加』。刊本として大阪市立中央図書館市史編集室編 (1967)『大阪編年史 第2巻 (自天正元年六月至慶長三年八月)』、大阪市立中央図書館、448。
- 17) 木村高敦撰『武徳編年集成』。刊本として大阪市立中央図書館市史編集室編 (1967)『大阪編年史 第2巻 (自天正元年六月至慶長三年八月)』、大阪市立中央図書館、448。
- 18) 小早川能久『翁物語』。刊本として岡谷繁実 (1944)『名将言行録』、5、岩波書店、8-9。
- 19) 平凡社地方資料センター (1986)『日本歴史地名体系 28 大阪府の地名 I』、627-628。
- 20) 三善貞司編 (2008)『大阪伝承地誌集成』、清文堂出版、55。
- 21) 配布物には、「天正八年豊臣秀吉が大坂城築城の際、防備の一策として関目より古市森小路間の十余町の道路を特に屈折させて (俗に七曲りという) 敵兵の進軍を俯瞰し、その軍容兵数を察知するのに便利なようにした。」とある。しかし天正8 (1580) 年には大坂城の場所は、石山本願寺であったので、「天正八年」という年号は天正11年の誤植であろう。
- 22) 小橋屋卯兵衛『絵本 榎並八箇洪水記』、長谷川南竹堂。刊本として、大野正義編 (2015)『大阪府立中之島図書館所蔵 絵本 榎並八箇洪水記』、大野正義、212-213。
- 23) 前掲19)、627。
- 24) 大阪市立榎並小学校の塀際に建立された花崗岩製石碑には、「(前略) 戦国時代 三好政長がこの辺りに榎並城を築き、子息政勝と共に居城とした伝える」と刻まれている。
- 25) 文禄堤の残存理由について、守口市広報課によれば、明治29 (1894) 年以降の淀川改良工事ははじめ、昭和2 (1926) 年以降の守口土地区画整理事業や京阪国道敷設などにもない、ほとんどの堤が撤去されたが、残存した部分にはすでに街村が形成されていたために土地買収が進展せず開発できなかったという。以下の文献から、守口市広報課の言質が追認できる。①西田彦一 (1973)『守口・門真』、山口恵一郎編『日本図誌体系 近畿』、I、朝倉書店、62-65。②駒井正三 (1991)『日吉公園はかつての淀川の中』、『ふるさと守口を訪ねて (改訂版)』、守口市市長室広報担当、64-65。
- 26) ①前掲20)、903-904。②吉田義昭 (1992)『守口陣、守口城』、大阪春秋、68、56-59。
- 27) 例えば、①宮地良典・田結庄良昭・寒川旭 (2001)『地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 大阪東北部』、地質調査所、2001。②三田村宗樹・橋本真由子 (2004)『ボーリングデータベースから見た大阪平野難波累層基底礫層の分布』、第四紀研究、43、253-264。③石井陽子 (2017)『平野の地下に埋もれた台地』、NatureStudy、63、58-61。
- 28) 増田富士雄・佐藤智之・伊藤有加・櫻井皆生 (2013)『Shazam 層序学をボーリングデータベースに適用する試み』、地学雑誌、122、892-904。
- 29) 前掲27) ②。③。
- 30) 大島昭彦・盛岡学・福本哲也・春日井麻里・山本浩司 (2010)『東大阪地域の鋭敏粘土層の分布域と堆積環境から見たその成因の再検討』、材料、59、2-7。
- 31) 例えば、①前掲11)。②西北地域史編集委員会編 (1988)『寝屋川市西北地域史 鞍呂岐』、寝屋川市西北コミュニティセンター、57-60。
- 32) 仁和寺の小字地名として「巷里山」が記録されている。寝屋川市誌編纂委員会編 (1956)『寝屋川市誌』、寝屋川市、233-238。
- 33) 日下雅義・青木哲哉 (2002)『中世の淀川流域』、週刊朝日百科『日本の歴史』、19、276-277。
- 34) 例えば、①木谷幹一 (2016)『淀川流域の「態と切」とは何だったのか』、京都歴史災害研究、17、1-7。②木谷幹一 (2015)『享和2 (1802) 年の淀川点野切れについて』、京都歴史災害研究、16、1-9。③木谷幹一 (2014)『延宝の仁和寺切れを復原する』、兵庫地理、59、39-42。
- 35) 前掲33)。
- 36) 前掲10)。
- 37) 前掲33)。
- 38) 三宅俊隆・西田敏秀 (1989)『枚方宿遺跡・岡本町地区 (第3次)』、枚方市文化財年報、IX、50-57。
- 39) 小谷利明 (1998)『戦国期の河内国守護と一向一揆勢力』、佛教学総合研究所紀要別冊『宗教と政治』、153-201。
- 40) 木谷幹一 (2003)『枚方市星が丘の海成段丘堆積物の花粉分析』、自然と環境、5、31-36。
- 41) 前掲33)。